

運命の丘

人

ナポレオン (四十四歳)

ダリユー (五十歳)

ミユラー (四十二歳)

モルチエール (四十五歳)

アンドレー (三十歳)

韃靼人二人

將校下士從卒其他

場所

モスコウ市外

時代

千八百一十二年九月十四日の午後

第一場

モスコウ市の西南、雀が丘の一部、丘の頂を舞臺の前面に現はして、背後は一面

にモスコウの市街を見下した景色、秋日和の午後二時過の日光が強くモスクワ河に反射してゐる。市内すべて本文にある通りの景。

軍服のナポレオン、馬を麓に乗り捨てた氣持で、數歩先に立ち、つか／＼と小急ぎに下手から丘の頂に現はれる。續いてダリユー、モルチエール、アンドレー及三四の將校從卒等登場。

(ナポレオン、モスコウの市街を見るや否)

ナポレオン モスコウ！ モスコウ！

(叫んで尙熱心に向うを見てゐる)

ダリユー モスコウだ！ モスコウだ！

(他の人々も之れに和して、竊うて市街の方を見る)

そら見給へ、あれがモスクワ河だ。其の向うがクレムリンさ。丸の内だ。綺麗ぢやないか。

モルチエール なる程、これや綺麗だ。まるで古い繪本が抜け出したやうな町だな。

ダリユー あの建物を見給へ。木造だらう。塗つた屋根や壁の色も違つてゐね。東洋的ぢやないか。其の前を、まるで灰色の熊が馬に乗つたやうなゴザイクめが、木材を横たへて通る所は似合つてゐる。配合が、いやぢやないか。

アンドレー 北國に似合はん明るい町ですね。空氣も實に澄んでゐる、たしかに神聖な町といふ感じがしますね。

モルチエール 眩しいやうだ。金の十字架が、まるで星を散らしたやうに光つてゐるぢやないか。あれが皆んな寺だらうか。寺の多い處だな、外郭も内郭も、見給へ、町の半分は寺だ。尖塔がまるで雜木林のやうに并んでゐる。其の一本々に金の星がかゝつてゐるのだ。

アンドレー 寺院ばかりが三百近いでせう。それから處々新月の微草も光つてゐます、マホメタンの寺でせう。斯うなると壯觀ですね。十字の星と新月が此の古い街の空に撒いたやうに浮んでゐる。これだけでも胸が躍りますね。あれが此の町の命なのだ。命のサンボルが、あゝして光つてゐるのだ、平和ですね。

ついで、そこいらまで煙硝の煙で重くなつてゐた空気が、茲へ來ると水晶を斷ち切つたやうに澄んでゐる。其の中に強い色を塗り立てた屋根や壁が品を作つてゐる所は、成るほど女性的です。ロシア人は此の町をおつ母さんと言ふさうだが、私等には美しい尼さんといふ感じですね。

モルチエール 處々随分大きな庭がある。人家の間に森を切つて撒き散らしたやうな處だ。何うしても繪本だ。是れが本當にモスコウなのかなあ。夢のやうだ。

（飽かず市街を見てゐたナポレオンは此の時初めてこちらを向き、近くに立つて居るモルチエールの肩を軽く叩いて）

ナポレオン おい！
モルチエール はッ！

（皆一齊に其の方を向く）

ナポレオン モスコウへ來たんだよ。氣をたしかに持たなくちやいかんよ。

モルチエール 陛下、夢のやうでございませうなあ。

ナポレオン 夢ぢやあない。本當のモスコウへ來たのだ。到頭來たのだよ。

ダリユー 夢が事實になつたのですね。

ナポレオン お前にも似合はん事を言ふね。初めから事實さ。夢が何で事實になるものか。俺がバリーでセギュール伯に言つて聞かされたのはそこさ。俺には初からモスコウは目に見えて居た。必ず來られるものといふ確信があつたのだ。確信は運命だ。運命は事實だ。

ダリユー 陛下の其の筆法によりすと、モスコウは陛下の運命でございませうね。

ナポレオン 運命だ、全く運命だ。俺には是非とも一度此のザールの城へ來なくちやならん運命があつたと思ふ。モスコウは私の戀人だ。古い、前世からの戀人であつたのだ。先つき一日見た時に、私はすぐさう思つた。今までこの懐しい戀人を人手に委せて置いたのが好ましいやうだ。

（振りかへつて復た市街の方を見る）

ダリユー 前世からの戀人ですね。約束されたる土地ですね。人生にはたしかさうしたものがありません。

アンドレー 併し閣下、前世からの戀人といふやうな者は、こんな北の暗い國へ來てこそ道理と思ひますが、フランスには、少なくとも女にさういふものがございませうね。明るい國の人間は淺い戀をします。其の代り急で

す。底まで透き徹つた小川の瀬のやうに、急な思ひをするのが、フランス人の習ひでございませう。

モルチエール 此處で女の話なんか怪しからんな。

ダリユー フランス男は戰をしながら戀を論ずるさ。

モルチエール 戀を論ずるもいゝが、早く陛下をクレムリンへ御供したいものだ。

アンドレー ミロラドウキツチ少將が歸つてから、彼れはれ二時間近くなりませう。もう、町の使節が來てよい時刻ですね。あゝ御覽なさい、今やつと敵軍の後衛が町を出はづれました。あの森の蔭に續いてるのが其れです。あれでクツゾフ元帥の率ゐて居られる九萬がすつかり退却した譯です。

ダリユー やあ、ミユラー將軍が市街の入口で盛に歡迎せられてゐるぞ。貧民どもが珍しさうに集つて來るぢやないか。まるで觀せ物扱だ。

ナポレオン クレムリン！ 響のいゝ言葉だ。あの邊が宮城だらうな。おい！ 地圖を見せないか。

（アンドレー、市街の地圖を披いて捧げ

る。ナポレオン、手に取つて見て
ふむ。
(顔を上げ、また市街を見入つて)

あれだ。クレムリン、クレムリン。俺はあの
宮中の繪を見た事がある。あの大きなサロン
には、さうく、イタリヤから磨かせて来た
大きな大理石の柱があつた。あの前にアレキ
サンドルと后とが並んで腰をかけて居た。あ
のアレキサンドルの神経願らしい顔は、決して
憎い顔ぢやない。私の兄弟にして、つき合
つてやりたいと思つた。

(直立して凝視してゐた將校等互に顔
を見合はせる。ナポレオン、顧みて)

ねえ、さうだらう？ 全くルツスは憎くない國
民だと思はないか。俺は好きだよ、俺は。
モルチエール 全く憎さげの無い國民でござい
ますな。のろつとして居て、素直で、勇敢で。
ダリユー いや、我々の脈管に流れてゐる血
が同じセルトの源だから……

アンドレー それもさうでせうが、一方から言
ふと寧ろ違つてゐるから相惹くのかも知れませ
ん。異性相惹く道理ですね。永い間冷たい
外部の壓迫で、反抗的に沸いた彼等の血は、
永久に熱いのです。所が、自然が温めて呉れ

た我々の血は冷熱が早い。僕はむしろ、僕が
西南の人であるといふ理由で、此の東北の神
祕な國民を慕ひたいと思ひます。

モルチエール は、君の言ふことは、あんま
り感に入り過ぎて可かんよ。第一我々は征服
者だぜ。強きものが弱きものを愛する關係
だぜ、忘れちゃ可かん。

アンドレー ですが、愛は強い弱いの關係では
ありません。

モルチエール は、生意氣を言ふなよ。

ダリユー まあいいさ。若いからなあ。戦をし
ながら戀を論ずる筆法だらう。ねえ、君。
(ナポレオンは地圖を巻いて手に持つた
まゝ、そこらを大殿に往つたり來たりし
て居たが、寄つて来て)

ナポレオン まだ來ないか。遅いぢやないか。
モルチエール もう來さうなものでございます
な。おい君、一つ偵察にやつて呉れ。

アンドレー は。
(下手へ行つて何か命ずると、一人の士
官急ぎ足に降り去る)

ダリユー 陛下はお疲れであらうから、そこら
へ假りに何したら何うだらう、
ナポレオン 要らん。俺の顔に疲れが見え

るか。

ダリユー いや、お顔色が却つて益々活氣を帯
びて參るやうでございしますが、何にしても一
週間以來のお疲れでございしますから。

ナポレオン 俺には疲労といふ事は無い。此の
眼の輝くのは、それ、運命が眼の前に來たか
らさ。此の晴れた空に、此の壯麗な景色を見
て、興奮せずに居られるか。ダリユーなども
顔色が違つて來たぜ。つい先つきまで君等の
顔にはポロディノの影が精りついてゐた。死
の影がついてゐた。それが今ぢやモスコウの
影が反射してゐる。生の影だ。みんなの眼が
躍つて居る、今にクレムリンの城へ這入つた
ら、君等が一番がけに何をしたらうな。モ
ルチエールは何が欲しいか。

モルチエール 久しぶりで善い葡萄酒でも御馳
走になりませうかな。

アンドレー 私は先づ靜かな部屋に引つ込ん
で、この興奮の心の褪せない内に日記をつけ
たいものでございします。

ダリユー 私もそれに賛成。
ナポレオン さうく、ダリユーは歴史家で詩
人だつたな。

ダリユー 『だつたな』は恐れ入りました。

ナポレオン 忘れて居たのだよ。

ダリユー 忘れられて少しも恨みはございませぬな。私などは新世紀の上にさしかけてゐる十八世紀の影のやうなものですから。

ナポレオン は、悟つたね。

ダリユー 却つて此のアンドレー君などが十九世紀の若い息を呼吸してゐて、自然と詩人になつてゐます。

ナポレオン ふん。若い者の時代か。俺などはダリユー、どちらの組か、若い方が古い方か。

ダリユー さやう：：陛下は勿論私などよりも若くていらせられるし、國家の上では新しい時代を代表せらるゝのでございませう。

ナポレオン 其の譯は？

ダリユー さやう：：十八世紀の纖弱な冷たい文明に對して、強い効力の要求が陛下のお體に權化したと申したら、如何でせうか。

ナポレオン ふむ。併し其の力は何處から來るだらう。私に言はずれば運命だ、運命！ 力はそこから來る。若し私が十九世紀の時代を暗示するとしたら、私は運命の權化だと言つて貰ひたい。

アンドレー (進み出て) 陛下陛下、私は唯今の瞬間に於いて、陛下

に神仙の如き高風を感じます。運命の權化！ 何といふ深いお言葉でございませう、手が此の通り感激に顫へて居ります。何うか握手を願ひたうございませう。

ナポレオン よし。

(微笑しながら固く握手する。其の途端に市街の方で爆發の音が一つする。皆々愕然として其の方を向く。ナポレオンも俄に正氣づいたやうに屹となる)

モルチエール あれだ。外郭に接した東の處に煙が上つてゐる。何事だらう？ うむ。騎兵が這入つて行くやうだから、今に分るだらう。是れや長く斯うして居るのは危険かも知れんよ。使節は何うしたのだらう？ 何うして遅いのだらう？

(一同無言で、待遣ひの様子に市街の方を見る。ナポレオン、こちらを向いて)

ナポレオン 今に來る。屹度來るよ。先つきの報告はまだか。もう一度偵察にやつて見い。

アンドレー は。

(再び下手へ行つて令を傳へる) 町が段々靜かになつて來るやうに感ずるが、誰かねえ。動く光線や活きた音波の刺戟といふものが、まるで無くなつたやうな

感じがする。見給へ、馬鹿に森として來たぢやないか。河の瀬の音が聞える。

モルチエール は、生の町がまた死の町になつたかな。モスコウがポロディノになるのかな。

ナポレオン 馬鹿ッ！ 投げて)

モルチエール (姿勢を正してナポレオンの方へ向き) 陛下、お氣に觸りましたら御免下さいませ。併し私は飽くまでも戦地といふことを忘れてたくないと思ひます。モスコウに何時敵軍が現れても驚かない覺悟はして居たいと思ひます。私は今以てまだ確實にモスコウを占領したとは思つて居りません。

(ナポレオン、無言のまま往つたり來たりしてゐる。皆々無言。一同の胸に一種の氣まづい心持が流れ込む。しばらくして)

ナポレオン 分つたよ、分つたよ。併し私にも確實にモスコウを占領したつもりで居る

ね。先つきからクレムリンの宮城で、大夜會を開く手筈まで考へて居る。二百九十五

寺といふ、夥しい寺の坊主どもを集めて論してやらうと、其の演説の腹案まで拵へた。寺の建物には、残らず大きな字で Mission de St. Pierre と彫りつけさせてやらうと考へた。此のモスコウには、お前等のうち誰を總督にしようかとそんな事まで考へてゐる。モスコウ占領！もう動かん事實だ。夢ぢやない、夢ぢやない。

(言つてぢつと市街の方を見下して立つてゐる。皆々同じ方を見て無言。此のとき一同の胸に一種の不安が萌す心持。やがてナポレオンはそこらを歩きはじめ

ダリー とうとう何時だらう？ 日があんな方へ行つたね。何うだらう、兵をやつてロストブチン總督を連れて來させては。モルチエール 何うもそれがよくはないかな。暗くなると面倒だぞ。先つきの爆聲が何か意味があるのぢやなからうか。

(ナポレオンはまた市街の方を見て沈黙してゐる。日影が薄くなつて、處々の庭木の森が黒んで來る。間を置いて)

アンドレー あゝ、來た！ 報告を持つて來た。

(騎兵一人、飛び下りて、アンドレーの前に直立し、封書箱を渡す。手早く開いて)

アンドレー あゝ、是れは先つきの爆聲に關聯した事です。
(急いで讀む内に顔の色がかはる)

是れは怪しからん、大事件でございます。
(皆々驚いて両耳を立てる。ナポレオンも無言で立つて聞いてゐる)

ロストブチン總督が囚徒を悉く解放した様子で、其の一人が先程の爆發に關して我が軍に捕縛せられました。場處はドロゴミロフの門に近い市街の空家で、爆發の原因等は不明、出火にはならなかつたが、附近で舉動不審な一人の鞆鞆人を捕縛したのださうでござ

います。
モルチエール 其の鞆鞆人を調べて見たのか。
アンドレー 取調べたが更に口を開かないと

ります。
モルチエール それや容易ならん事だ。すぐ市街を警戒しなくちやいけません。

アンドレー 勿論やつてるやうです。
モルチエール それから其の捕縛した鞆鞆人は連れて來たのか。居るならすぐ此處へ連れて

來いつて。通譯を附けな。

ナポレオン なまに心配するには及ばない。大勢はもう極まつてゐる。この運命は動くものぢやない。そいつは追つ放してやれ。

モルチエール でございますが、此の際注意しませんと……

ナポレオン いゝさ、いゝさ。それは何か偶然爆發したんだらうよ。偶然の事だ、恐るゝに足らん。
(立つてゐる騎兵に向いて)

さう言つて行け。
(騎兵敬禮をして引きかへす)

それよりか、一方の様子は何うだ。一向に報告が來んぢやないか。誰れかこの内で行つて見い。

アンドレー 私か參りませう。
(敬禮をして行かうとする時第二の傳令來る)

おゝ、報告か。
(下手へ急ぎ足に行く時、馬から飛び下りた士官、あわてた様子で、聲を滑めて話

す。アンドレーの顔色またく變る。他の二人も寄つて來て報告を聞き、顔を見合はす。ちよつと密話をして、ナポレオ

ンの方を振り向くと、立つて鋭く皆の方を見てゐたナポレオンの眼と見合つて、あわてて他を向く。同時にアンドレーがつか／＼と群を離れて進み寄り、顔へた聲で、

陛下！ モスコウは空虚でございます！

ナポレオン えゝ？ モスコウが空虚？

アンドレー はい、空虚でございます。

(ナポレオンは聞くと同時にアンドレーの上に投げた鏡い眼光を、市街の方へ轉じて、無言のまゝちつと見てゐる。顔の色變る。アンドレー其他、皆々佇立したまゝ、一齊にナポレオンの横顔を見つめて、身動きせず。しばらくの間、森として聲無き氣持。)

ナポレオン 馬車を持つて来い。

(士官の一人走り去ると、跡からナポレオン大股につか／＼と丘を下手に降りる。皆々沈黙のまゝ續いて降り去る。丘の上には夕日が淋しく薄れて残る。)(幕)

第二場

モスコウ市の一方の入口たるドロゴミロフ

の見附が夕日を負うて遠見に立つてゐる。路傍の土手上の景。

髪も髭も蓬々と伸び、垢まびれの顔の蒼白く寝れた韃靼人二人、土手に腰をかけ、下の路からかけて向うの方を眺めてゐる體で暮上る。

甲 一體どうしたと言ふんだ。馬鹿に騒ぎ出したぢやないか。

乙 町へ這入つて来ると言ふんだらうよ。

甲 それにしてもお前をよく放免しやがつたなあ。よつほど言ひ抜けがうまかつたと見えるな。

乙 俺は言ひ抜けなんかしやしねえ。たゞ言葉は一切韃靼語のほかは分りませんといふ風をして黙つて居ただけさ。なあに、俺の體はどうせもう、持てあましてる體だあな。殺さうが活さうが、悲しくもなけれや、嬉しくも無え。總督さんに頼まれたから、火だけはつけてやるが、つけねえかも知れねえ。どつちだつていゝ事だ。

甲 だつてお前、同じロシア人だな。頼まれた以上は……

(向うを欠て)

あゝ、通る／＼。あれがナポレオンだらう。来ねえ／＼。行つて見ようよ。

(甲が乙を引つ張るやうにして後へ降りる) (舞臺廻る)

第三場

ドロゴミロフの見附前、夕暮の光景。門の兩側に數人の衛兵が立つてゐる。路を離れて前場の韃靼人二人及び貧民體のもの三四人まばらに立つて見てゐる。

ナポレオンは馬車を降り、徒歩で、第一場の人々を従へ、ミュラーに先導せられて門の前まで来る。

ミュラー 是れがドロゴミロフの見附でございます。御命令で兵は總で一足先に市街へ入れて置きました。

(ナポレオンは、見附の入口でばたりと歩を止め、石門を見上げて立つてゐる。皆々一様に立止まる。しばらく無言)

ナポレオン もう是れでいゝ。此の門さへ見れば、私は満足だ。今夜は私は引きかへして此の村へ泊らう。ミュラーは市街の方を氣をつ

けい。

(言つてすたくと跡へ歸らうとする。皆々驚く。ミュラー、急いで其の前に立ちふさがる)

ミュラー 陛下、それはまた何うした譯でござ

います。こゝまでお出でになつて引つかへす

と仰しやるのは意を得ません。縦ひ市民は遁

走しても、市街と宮殿とは残つて居ります。

陛下、是れが此の大戦争の目的地たるモスコ

ウの町でございませす。是非お這入りを願ひま

す。申すまでもなく危険は少しもございませ

ん。ミュラーが身を以てお守り申して居りま

す。危険をお恐れになる陛下ではない。此處

からお引つかへしになるといふ法は、斷じて

ございません。

(ナポレオン、再び門の方を向いて、見上

げたまゝ、黙して答へず)

モルチエール ちよつとでも、クレムリンの宮

城へ陛下がお這入りになれば、一般の士氣が

振ひます。

アンドレー 陛下はモスコウの町に這入るのが

運命だと仰せられたでございませんか。其の

通りになつて參つたのです。躊躇なき理由

はございません。

(熱心に進み寄つて)

運命! 運命! 陛下、運命の門はこゝに開

いて居ります。たゞ一足です。クレムリンの

門も開いて居ります。我等、フランス人の手

で明けて待つて居ります。あれ程待ち焦れて

おいでになつたモスコウへ来たのでございま

せんか。陛下は運命の権化だと仰しやつた、

あの豫言が今一足で充されます。よしロシア

人は一人も居なからうが、フランス人、モス

コウで結構でございませんか。何うかお這入

り下さい。陛下、我々がお手を取りませうか。

馬車にお召しなさいませうか。

ナポレオン (ちよつとアンドレーの顔を見て、や

や涙ぐみ)

運命! 運命! 運命の門!

(アンドレーの肩に兩手をかけ)

空虚なモスコウ! 空虚なクレムリン! は

は、は、

(絶望的に笑ひすて、すたくと門の中

に這入る。皆々驚いてついて這入る。跡

に衛兵も見物人も居なくなると、先程の

鞆鞆二人門の前に進み出で、人々の這

入つた跡を見送つて)

乙 運命の門だよ。

甲 這入つて行つちやつた。

乙 は、は。

(乙が氣のない笑ひを一聲したまゝ、二人

とも口を明き、窪んだ眼を一杯に見ひら

いて、無意味に門を見て居る。日が暮れ

て行く)

(幕)

(モスコウはフランス人にはモスクウであらうし、ク
レムリンはロシア人にはクレムリンださうである。又
ダリユーは實際は此の時四十六歳であつた。是等は
舞臺上の發言の便宜や筋の便宜で詩的特權の自由を
用ひた。)



◎ 個々の告白、事々の告白、すべて誠實であ
ればそれでよろしい。既に告白した告白と、
未だ告白せざる告白とに論なく、一切個々の
事實、自己内心の實行を結合しようとする時
に、初めて人生觀上の努力が生ずる。人生
觀とは統一觀といふことに外ならぬ。而して
統一觀がさう手軽に成り立つ譯のものではな
い。お手輕料理の統一觀なんぞ、我々の前に
何程の値打があるものか。(一覺がきより)